

2015 年冬休み スタディツアーによせて

この度は弊団体のスタディツアーにご参加いただき誠にありがとうございました。
当団体もこのスタディツアープログラムをはじめて丸 2 年となり、私にとってもフィリピンでの 2 回目の年越しとなりました。来るたびに日本とフィリピンの文化の異なる点と共通する点が見え興味深く思っています。このツアーではそんな異なる背景を持つ人々同士が交流することで「人が人の力を引き出す」エンパワメントし合う力を感じています。
こうして継続することでこの事業が当団体の目指すどれもが魅力的に働き生きられる社会の実現というビジョンになくはないと実感しています。
今回のプログラムでは、参加者の皆さんが日本の衛生教育（うがい手洗い）を伝え実践してくださったことを、地域の人々がとても喜んでいました。日本にいと当たり前のようと思ううがい手洗いの仕方も、フィリピンでは知らない子供も多く、こうした機会に大人にとっても考える機会となり、今後の継続した取り組みにつながります。
セブ事業地では、今回はじめて事業拡大したシティオホープにてホームステイプログラムを行い地域の人々との交流を深めることができました。
こうして皆様が参加してくださることで弊団体と地域の交流も深まり、地域の人々の地域社会参加力を引き出す機会につながっています。厚く御礼申し上げます。

理事長：成瀬 悠

会計ご報告

（収入）	206,600 円	
スタディツアー参加費	194,600 円	
サポーター費用	12,000 円	
（支出）	206,600 円	
セブプログラム代金合計：16,700php		
宿泊費（ホステル 2 泊&ホームステイ 3 泊 3 名）	6,000php	
現地ボランティア料金	2,600php	
飲食費（歓送迎用、昼食）	2,500php	
雑貨製作費（雑貨作り体験）	200php	
旅費交通費	2,200php	
現地協働団体（Tulay sa Kinabuhì）寄付	3,200php	
マニラプログラム代金合計：8,660php		
宿泊費（ホステル 2 泊&ホームステイ 1 泊 4 名）	2,360php	
現地ボランティア料金	700php	
飲食費（歓送迎用、昼食）	3,300php	
雑貨製作費（雑貨作り体験）	300php	
現地協働団体（Paaralang Pantao）寄付	2,000php	
日本側事業費：	130,520 円	
アテンド費用	27,000 円	
事務経費	15,000 円	
旅費交通費	70,000 円	
ハロハロ会費	12,000 円	
ハロハロ寄付金	6,520 円	

参加者レポート 1

2015年12月26日～2016年1月2日のマニラ・セブスタディーツアーに参加した。日本とは違う国の人達がどのような生活をしているのか興味があったし、その国で日本のNPOやNGOといった団体がどのような活動をしているのかということにも関心があった。

スタディーツアーに参加する前に、映画監督四ノ宮浩の『BASURA』というドキュメンタリーを見た。スモークーマウンテンでスカベンジャーとして生計を立てている人たちを追った映画だ。スタディーツアーでも『BASURA』に映し出されていたような重い雰囲気を味わうことになるかもしれないと思っていたが、実際に行ってみると映画の世界観とは違っていた。マニラで話を聞かせてもらった人々も、セブ島でホームステイをさせてもらった地域の人々も、お金の問題やゴミの問題、教育の問題など色々困っていることはあるだろうが、何かにつけてよく笑っていた。その笑顔や笑いは日々の生活を営む人々が持つ心のゆとりや朗らかさからくるもので、貧困という視点だけからフィリピンを取り上げた『BASURA』には無いものだった。私が実際に話を聞かせてもらった人々は、現在や将来をそれ程悲観することなく、ただ自分たちの生活をありのまま受け入れつつ、その生活をより良くしていこうとしているようにみえた。

今回のスタディーツアーでは、そのようなフィリピンの人々とNPOハロハロがどのように関わっているかということを見せてもらった。案内してくれたはるかさんは、ハロハロとして、地域の人々が自分たちの生活や住んでいる地域についてじっくり考え行動する場を共に創ろうとしていた。

それがよくみえてきたのは、セブ島のシティオホープという地域のお母さん達とテーブルを囲み、地域の問題について語る場でのことだった。ホームステイをさせてもらったシティオホープは小さな集落で、1か月の収入が約4,000ペソ(約12,000円)の家庭もあれば約6,000ペソ(約18,000円)の家庭もあった。彼らは自分たちの手で家を建て、共有の井戸から水を汲んで身体を洗い、洗濯をし、家にトイレがない家庭もあった。何か困っていることがあるかという質問をはるかさんがした時に、女性達は口々に行政のゴミ収集車が回収に来ないので困っていると、家にトイレが無いため川で用をたすが、海の潮が高いときにはそれらが戻ってきてしまうといった話をした。様々な課題を出し合った後、自分達ができることは何かという問いかけがなされた。その回は地域の至る所に落ちているゴミを定期的に拾うことになった。掃除リーダーが一人決まり、ゴミ拾いの日には彼女を中心になって地域の人達に呼びかけることになった。

このように各々が日常生活の中で困っていることを口にする場をつくることで、互いにこんなことを思っていたのかという驚きや気づきが生まれる。そのような話し合いの場において、はるかさんは常に、地域が抱えている課題を解決するためにはどうしたらいいのか、そのためにはどのようなステップを踏んでいけばいいのかということを村の人達に問いかけていた。住民が自身の力で自分たちの望む地域をつくっていくためには、自分たち



で地域の将来像を描き、そのゴールに向かって計画を立て、一步一步ステップを踏んでいく必要がある。そのためにハロハロは地域の人々と協働しているし、最終的にはハロハロ無しで地域の人々が動いていくことが重要だと、はるかさんが話してくれたのが心に残っている。



もう一つフィリピンスタディーツアーに参加してみて印象的だったことは、先にも述べたように、出会った人々が明るくて笑顔が絶えなかったことだ。日本に比べて地域の人間関係が密で、様々な年代の人とコミュニケーションをとる機会がコミュニティの中に多々あった。現地ボランティアとして付き添ってくれた高校生のジュンジュンや大学生のジェネリンが子ども達をまとめるのが上手で、大人に対しても物おじせず意見を言っていたことからその様子がうかがえた。また子どもたちも天真爛漫で、フィリピンの手遊びを教えてくれたり、散歩につきあったりしてくれて、知らず知らずのうちに緊張していた私の心をほぐしてくれた。

彼らの樂觀さがでていると思わずふふっと笑ってしまったのは、「貧困地域」と呼ばれる地区で、トイレよりもカラオケの普及率の方が高いかもしれないという話を聞いた時だ。確かにシティオホープでは、トイレは無いけれどカラオケの機器は持っているという家庭があった。セブでもマニラでも日が暮れると、どこからともなく歌声が聞こえてきた。それも一か所からではなく、至る所から結構な音量で聞こえた。大晦日の夜ともなると、シティオホープでは各々がカラオケ機と

ソファを家の外に出して、子どもも大人も好きなように歌って踊っていた。年明けと同時に上げる花火も自分たちで用意しているようで、四方八方で花火がドンドン上がるものだから首を回すのに忙しかった。とても賑やかで楽しい年越しだった。

スタディーツアーに参加する前までは、フィリピンは地図の上だけで知っている国だった。こんなに朗らかで温かい人たちが住んでいるとは知らなかったし、日本にハロハロのような活動をしている団体があるということも知らなかった。フィリピンにはごみ山の問題や、住環境やインフラの整備、小学校への就学支援の必要性、就労支援など今すぐに解決できない問題が多々ある。それらの課題に対して、出会った人々が行政の働きを待つのではなく、自ら行動していたことに感心した。彼らに感化されて、私も自分の地元の人々と話をして、地域が抱える問題についてもっと向き合いたいと思った。

参加者レポート2

私は現在大学でフェアトレードを広めることを目的としたクラブに所属しており、貧困について考えることがとても多くなりました。それに伴い、貧困について自分の目で確かめたいという思いからこのスタディツアーに参加することを決めました。その目的は果たすことが出来ました。これからこの経験をどう生かしていくかが自分自身の課題です。

私はフィリピンに3日間しか滞在しませんでしたでしたが、たくさんのことを学ぶことが出来ました。まず最も驚いたこととしては、インフラ整備がおくれているということです。特に下水事情については大変衝撃でした。トイレトペーパーが流せないトイレ、お湯が出ないシャワーなど、日本で生活していると考えられないことです。今後、フィリピン経済が発展していく中で、生活や産業の基盤となるインフラが大きく発達していったほしいと思います。初日に行ったユニカセレストランでは、現地にフィリピンの貧困に携わり、活躍されている日本人の方がいるということがとても嬉しかったです。また、中村さんのプレゼンは、フィリピンと、フィリピンの子供たちについて多くの事を考えさせられました。しかしユニカセレストランで働く方以外のチルドレンアットリスクに合った子どもたちは山ほどいると思い、マクロな視点からフィリピン全体を変えなければならないと考えました。2日目は大変充実した内容で少々疲れがでてしまいました(ごめんなさい)が、まさかあれほど大勢の未就学児と一緒にコミュニケーションが取れるとは思っておらず、とても楽しかったです。早急で考えたうがい手洗いの方法でしたが、一回でも多く実践してほしいと思います。パヤタスの家庭訪問の際は、パヤタスの実態を知ることが出来ました。大通りから少し奥に行くと、簡単なもので作られた雨漏りは当然の家がたくさんありました。これが日本で言われているパヤタスの貧困か、と思いきや、パヤタスの住民はとても前向きで、家庭があり、居場所があるだけでとても幸せそうでした。「貧困」というとマイナスなイメージがありますが、本人たちはむしろプラス思考で明るくて、安心しました。このようなフィリピンの人々なら、いつか教育が発達したときに大きく成長できるのではないかと考えました。

今までフィリピンに関して無知だった私は、貧困地域として多くの人に知られているパヤタスへは、一人では到底行くことができなかったと思います。ハロハロを通じて新しい視野を広げることができました。成瀬さんには大変感謝申し上げます。



参加者レポート3

今回のスタディーツアーが自分にとって初めてのフィリピン訪問でしたが、普通の観光旅行では目を向けることがないリアルな現状をたくさん体験できたツアーだったと思います。都市の中心部から車でわずか数十分のところにゴミ捨て場やスラム街が存在し、そこは富裕層や観光客でにぎわう都市部とはかけ離れた光景でした。今回のツアーでは現地の人たちの話を実際生、教育、貧困などしているのだという的だったことは、私たちの多くが、自分就けるようになることです。貧困の中で子供たちの将来が何職に就くためには教育を受けることがどうしても必要になります。日本では当たり前のように感じる「教育を受ける」ということが彼らにとっては死活問題であり、精神的経済的に自立して生きていくために大切なことなのだと感じました。



に聞くことができ、彼らは衛様々な社会問題の下で生きことを学びました。特に印象インタビューで話を聞いた人の子供が教育を受けて職にことを第一に考えていたこ生活する彼らにとっては子より重要な懸案事項であり、

また現地でのホームステイでは多くのことを学んだだけでなく、本当に楽しい思い出を作ることができました。現地ではホストファミリーだけでなく近所の人たち全員が、いきなり来て言葉も通じない見ず知らずの外国人を快く受け入れてくれて、本当の家族のように手厚くもてなしてくれました。彼らの生活は日本での生活より不便なものでしたが、地域全体が家族のように人と人の密なつながりがあり、誰もが笑顔で暮らしている姿が印象的でした。大晦日の夜は深夜までダンスとカラオケで盛り上がり、年越しの瞬間は爆竹と花火で盛大に騒ぐというフィリピン流で一緒に新年を祝い、一生忘れない年越しとなりました。たった3泊の滞在だけで、言葉の壁もあり全てが通じ合えたわけではありませんが、ホストファミリーとはとても楽しい時間を過ごせました。お別れの時にホストファミリーが涙を流しながら「君はもううちの家族の一員だ」と言ってくれて、自分も涙が止まりませんでした。



ツアー全体を通して、フィリピンに存在する社会問題の数々は単に資金や技術の不足だけに起因するものでなく、より根深い問題であると感じました。それは一個人では動かすことができない行政の問題であったり、外部からのマネジメントだけでは変えし難い人々の意識の問題であったりもするということです。日本では当たり前だと思っている設備やシステムでも、それをフィリピンで実現することは必ずしも一筋縄ではいかないと感じました。また現地で、自分たちの生活をより良くするために行動を起こしている人たちや、困っている他人を助けるために奔走している人たちの目の当たりにすることで、自分だったら何ができるのかということを考えさせられました。まだまだ自分の中で答えらしきものには至っていませんが、今回のツアーでの国籍も生活環境も違う人たちの考え方を少しでも知ることができたのは自分にとっても貴重な経験となりました。最後に、今回のツアーで一緒した皆さん、ありがとうございました。



参加者レポート4

今回、2泊3日のマニラのみ参加しました。3日といっても、仕事の都合で深夜に到着したので、実際は2泊2日でした。夜中に迎えにきてくださったハルカさんには、本当に感謝しかありません。他のツアー参加者の方とは次の朝に顔合わせをしましたが、1日目に学んだことや話し合ったことを、後から合流した私にいろいろと教えてくれました。

私はいわゆる先進国でない国を訪れるのが初めてだったので、とにかくあらゆるものが新鮮で衝撃でした。路上の汚れ、車の運転の荒さやクラクションが鳴りっぱなしの道路、鳥がまるまる一羽吊るされている露店。

特に、お世話になったパタヤス地域は衝撃的でした。よく分からない（ガラス？）破片や液体の流れるところを子どもが裸足で歩いている（そして誰もそれを気にした様子がない）。ゴミや家畜の匂い。普段の自分の生活では考えられない衛生環境でした。その路上で子どもたちは集まって楽しそうに遊んでいました。もちろん心の中にはいろいろ抱えたものがあるでしょうが、貧困地域の子どもはみんな暗い顔をしていると思っていた私には、その光景はインパクトがありました。

パタヤス地域で現地団体の代表の方やスタッフの方のお話を聴けたこと、子どもたちと交流したこと、家庭訪問をしてインタビューさせていただいたこと、フェアトレードの雑貨作り、全て大変貴重な体験になりました。特に、2つの団体で、「そこに住んでいる人たちが自分たちで活動や運営をしている」ところを見学させてもらえたのが、私にとって大きかったです。みなさんとてもフレンドリーに接して下さって、楽しく過ごさせてもらいました。

また、フェアトレードの雑貨作りでは、自分の手では全く形にならなかった材料が、次の日に完成したコインケースにして頂いたときにはそのビフォアアフターぶりに職人技を見ました。フェアトレード、考え方は間違っていないけど、経済的に厳しい今、実際には安いほうを選んでしまう人が多い。余裕のある富裕層向けだと思っていました。でもそのコインケースを手にして思いました。

「女性かわいいものにはお金を出す」

ブランド化を進めておられるというお話をきいて納得しました。

この旅で一番感じたことは、物質的に貧しいことと不幸せであることは必ずしもイコールでない、ということです。考えてみれば、被支援国であった昔の日本人が全員不幸せであったわけではないと思うので当たり前のことですが、物質的に豊かでないと幸せではないという価値観が自分の中にあったということに気が付いたという点でも衝撃でした。「経済的に困っている＝不幸せ」ではなく、「こういうことに困っているけど、家族と一緒に暮らせて幸せ」という価値観に出会えたことが嬉しかったです。ただ、これはフィリピンの人の価値観によるもので、他の国ではまた別なのかなという思いもありました。

今まで、支援とは効果的なバックを見つけて、それをいろんな地域に適用するというイメージでしたが、実際にフィリピンに来て、支援先にもさまざまな文化や価値観があり、場合によってはそれに合わせた支援を行う必要があると学びました。そして、現地の団体を支援するのは、その面から見て効果的だということを知ることができました。

短い期間でしたが、とても濃い時間を過ごすことができました。なにより、楽しかったです。ハルカさん、同じツアーの参加者さんたち、現地の方々、本当にお世話になりました。ありがとうございました！

